思い出してもらえる存在に…

子どもの頃、私は“おばぁちゃんっ子”だった。私にとって祖母は、いつもいつでも優しくて、怒られた記憶は１度もない。全身リウマチで手作業も足も不自由なのに孫たちに食べさせようと大好物の料理をいっぱい作ったり、何人もいる全ての孫たちにランドセルを買ってくれたのも祖母だったし、毎日の通院で顔をあわせる友人から珍しいお菓子やお土産をいただいた時は自分は食べずに持って帰って来て『美味しいものもらったから、ミーちゃん食べな』って…、そんな風に、なんでもかんでも孫優先の本当に優しいおばぁちゃんだった。

１１月は、私が大好きなそんな祖母の２４回目の命日月だ。今でもはっきり覚えている。１１月に入ってすぐなのに、雪がチラつく寒い日だったその日の早朝、トイレで倒れていたのを見つけて泣き崩れたことを…。

大好きな人や大切な人は、亡くなっても後何年たったとしても、決して忘れられることは無いし、思い出とともにずっと記憶や心に残っていると思う。

私自身、祖母だけでなく祖父も父も既に亡くしているし、家族や親

戚だけでなく早や天国に旅立っている同級生や友人もいる。

思い出すと、切なくなったり寂しくなったりするけれど、その反面フッと笑顔がこぼれたり、素直に『ありがとう』って思えたりもする。

我が子も手が離れるほど成長し、自分もこの年齢になった今だから思う…もし自分もいつか亡くなったときは、そんな風にずっと忘れずに、誰かに覚えていてもらえる人になりたい…って。

もちろん、『大内交流館』においてもそう。

辛いときや悩んだとき、嬉しいことがあったとき…どんなことでも“話を聞いてほしい！”と思ったときに居場所である『ここ』を思い出してもらえるよう、そんな場所であり続けていきたいなと思う。

人として、職員として、自分の存在意義と存在価値を見つめ直しながら、いつか天国に逝く日まで『幸せに生きていきたいなぁ』と思う。

PN・ミーさん

